

子どもたちの深い心の傷

シリア内戦は長期化し、レバノンのシリア難民の多くはすでに4年以上も難民生活を強いられています、最近ではシリア北部アレッポの戦闘激化で、新たな難民も増えています。

ローマ時代の遺跡として有名なパールベック神殿の近くにあるワーベル難民キャンプには、そうしたシリアからの難民が多く暮らしています。

脱毛症の5歳児 ワーベル難民キャンプの幼稚園に最近入ったNちゃん(5歳)。20日ほど前にアレッポ地方から両親と弟(3歳)と一緒に避難してきました。前日、ISの戦闘員が彼女の家に突然侵入。幸いにも家族は無事でしたが、その出来事は幼いNちゃんの心に傷を残しました。レバノンに避難して以来、彼女は頭に手を当てたままで。幼稚園で給食を食べるときも、友達と遊んでいるときも頭から手を離しません。髪の毛も抜けて頭皮が見える状態になっています。幼稚園のスタッフが精神科医に紹介しカウンセリングを受け始めました。シリアから避難してきてまだ日が浅いNちゃん。心のサポートはこれからです。



引きこもりの少女 シリアから避難してきてすでに3年が経つAさん(11歳)も、戦争や家族の死、慣れない避難生活に心の傷を抱えたまま毎日過ごしています。Aさんもアレッポからワーベル難民キャンプに両親と二人の兄(16歳、14歳)、姉家族と一緒に避難してきました。シリアでは爆撃で兄(当時23歳)を亡く



し、感電事故で姉(当時11歳)を失っています。また避難後しばらくして父親はシリアに戻り、それっきり連絡が取れなくなってしまいました。現在、UNRWAの支援(一月約3500円)と当会の食糧配布、そして二人のお兄さんが小売店の荷物運びで得る日給(約800円)だけが一家の生活の糧です。

Aさんはレバノンに避難してきて以来、学校に通っていません。外に出て知らない人と接するのが怖いからです。唯一心を許しているのは、お姉さんの子どもでシリアから一緒に避難してきた7歳のSちゃん。キャンプの外に住み学校に通っているSちゃんが、週末に

遊びに来るのを楽しみに、普段はお母さんと日の当たらない小さな部屋の中で一日を過ごしています。Aさんの顔色は悪く心のサポートが必要だと察せられました。補習指導員が「Sちゃんと一緒にセンターのアクティビティに参加してみる?」とAさんを誘い、無理のない範囲で彼女が居場所を見つけられるようにサポートしていくことになりました。

紛争により多くの子どもが心に傷を負っています。何年もどこにも行き場がないまま、経済的にも精神的にも追い詰められた生活を強いられている子どもと家族がたくさんいます。ワーベル難民キャンプで私たちが実施している食糧配布は、そのような支援を糧に生活を送る家族にとって大きな手助けとなっており、また幼稚園や補習クラス、その他の活動も子どもたちの心の回復を担う重要な支援です。



シリア難民の住居(手前の小屋)



食糧を受け取る